

国立国語研究所学術情報リポジトリ

沖永良部島における危機言語の継承と住民意識： 知名町田皆集落の全戸調査より

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2025-07-25 キーワード (Ja): 言語継承, 危機言語, 沖永良部島, 琉球諸語, 言語意識 キーワード (En): language revitalization, Okinoerabu, Ryukyuan language, intergenerational transmission, language awareness 作成者: 横山, 晶子 メールアドレス: 所属: 国立国語研究所
URL	https://doi.org/10.15084/0002000516

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



沖永良部島における危機言語の継承と住民意識

——知名町田皆集落の全戸調査より——

横山晶子

国立国語研究所／人間文化研究機構

要旨

本研究では、鹿児島県奄美群島沖永良部島知名町田皆集落において、住民の「しまむに（北琉球沖永良部島のことば）」の理解度・産出能力・継承意識・学習ニーズを全戸調査により分析した。調査の結果、「しまむに」を理解できると答えた割合は全体の約7割であったが、話せると答えた割合は約5割にとどまり、理解と産出には差があることが明らかになった。また、方言能力の向上を望む住民は多く、特に「日常生活の中で自然に習得すること」を重視する傾向が見られた。次世代への継承については、76%が継承を望んでいるものの、実際に何らかの継承活動を行っているのは約1割にとどまり、意識と行動の間にギャップがあることが確認された。この結果は、住民の言語意識を考慮した持続可能な方言継承施策の設計に示唆を与えるものである*。

キーワード：言語継承、危機言語、沖永良部島、琉球諸語、言語意識

1. はじめに

本稿は、奄美群島沖永良部島田皆集落において、全戸を対象に行った意識調査から、住民の言語継承に対する意識とニーズを分析したものである。

沖永良部島の言語（以下、しまむに）は、UNESCOの「危機言語地図（*Atlas of the World's Languages in Danger*）」（Moseley (eds.) 2010）に掲載されており、“今何もしなければ、消滅の危機にある”と考えられている。こうした中、島内の和泊町、知名町と国立国語研究所は2019年に「方言継承に向けた協力協定」を締結し、地域住民と研究者が協働して、様々な言語記録、継承活動を行っている。

知名町田皆集落においても「しまむに」の記録と継承を行う住民団体「たんにゃむにサークル」が中心となり、本格的な辞書編纂活動が行われている（Yamada and Yokoyama 2024）。本調査は、地域言語の記録・継承の取り組みを進めるにあたり、現在の住民の意識とニーズを把握するために、田邊ツル子氏（たんにゃむにサークル）が企画し、たんにゃむにサークル、山田真寛氏（国立国語研究所）、筆者らが協力して実施、分析した。

類似の調査として、2020年に沖永良部島全島を対象に行った意識調査（横山 2023）があるが、

* 本稿は国立国語研究所の共同研究プロジェクト「消滅危機言語の保存研究」（プロジェクトリーダー：山田真寛）、JSPS 科研費 24K00069（代表：横山晶子）の研究成果である。本稿の内容については「田皆字しまむに意識調査報告会」（2024/6/1、田皆コミュニティセンター）にて発表を行った。本調査にご協力いただいた、たんにゃむにサークルの皆さま、田皆集落区長、田皆集落住民の皆様に深く御礼申し上げます。

こちらは希望者を対象とした非確率サンプルに基づく標本調査¹であり、偏りが生じやすい。これに対して本調査は、田皆集落内の全戸に調査票を配布した調査であり、一集落に限定した結果ではあるものの、より偏りなく地域住民の言語意識の実態が捉えられたと考える。なお、「しまむに」の理解度について、意識調査ではなく言語実験で明らかにしたものに横山・籠宮（2018）がある。

調査全体の結果については、横山（2024）に web 公開しているが、本稿は地域言語の継承に向けた現状把握のため、地域言語の運用能力の自己評価、継承への意識について尋ねた項目の結果のみをまとめる。なお、調査では、各質問項目について全体の傾向を把握したのちに、一部の回答を選択した対象者に対して、更に質問をする分岐質問を設定している。これは「地域言語の継承」という目的を設定した際に、その目的に対してより重要な対象者の意識を理解するためである。言語継承活動において、アプローチするターゲットを狭めていくという方針は、横山（2021）で報告している。

2. 調査概要

2.1 調査地

調査地である沖永良部島は、奄美群島に位置する人口 11376 人（2024 年 12 月 1 日時点、和泊町、知名町ホームページより）の島である。島内は和泊町、知名町の 2 町に分かれる。田皆集落は、沖永良部島最西部にある人口 559 人の集落²で、町内では市街地の知名集落、瀬利覚集落に次ぐ比較的大きな集落である。

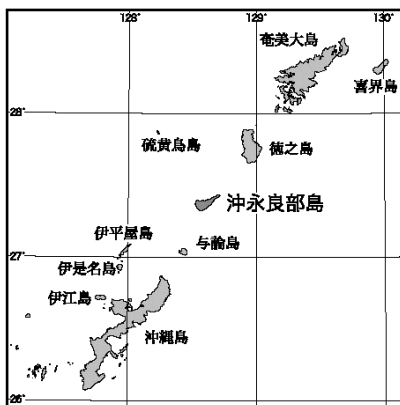


図1 沖永良部島の位置

¹ ランダム・サンプリングを用いない回答の集め方。横山（2023）では、SNS 等での告知や、役場や保護者会・老人会を通じて回答を呼び掛けた。

² 2024 年 12 月 2 日時点。知名町ホームページより。

2.2 調査概要

調査対象は、2023 年 8 月～9 月に田皆集落に在住していた小学 5 年生以上の住民、調査時期は 2023 年 8 月～9 月、調査は紙面調査によって行い、対象によって 3 種（①一般、②中高生、③小学生）の調査票を用意した。地域団体である「やぐにゃ（現：たんにゃむにサークル）」が主体となって実施し、一般 259、中高生 17、小学生 11（合計 287）の回収があった。回収率は、一般 60.27%、中高生 85%、小学生 100% である。

3. 調査結果

3.1 基本情報

回答総数は 287（一般 259、中高生 17、小学生 11）。性別は、男性 133、女性 154。年代は、10 代 28、20 代 8、30 代 21、40 代 29、50 代 40、60 代 74、70 代 66、80 代 17、90 代 4。子どもの有無（「一般」のみに質問）は、子供がいる方が 209、いない方が 50。出身地（15 歳までに最も長く過ごした土地、一般のみに質問）は、知名町が 205、和泊町が 8、島外が 46 であった。

3.2 しまむにの理解度に関して

まず、しまむにの理解度と理解度向上の希望について尋ねた。

3.2.1 しまむにの理解度

地域の方が自身のしまむにの理解度をどのように評価しているかを尋ねるために「あなたは方言³をどれくらい理解できますか？」という質問を行った。この結果、全体の 40% が「よく分かる」、29% が「ある程度分かる」、22% が「あまり分からない」、6% が「全く分からない」と回答した。

この結果を出身地別（一般のみ）に集計し直すと、島内出身では「よく分かる」「ある程度分かる」と回答した割合が 8 割に上るのに対し、島外出身者は 4 割ほどにとどまった。また、小中高生は約 9 割が「あまり分からない」「全く分からない」と回答した。表 1 は属性別の集計をまとめたもの、図 2 は出身地別の回答をまとめたものである。以下、表には無回答または無効回答を含み、図は有効回答のみ含む。

³ 筆者は、沖永良部島の言語について、島全体の言語を「沖永良部語」、集落ごとの variation（言語変種）を「方言」と考えている。ただし、地域では島の言語についても「方言」と呼ぶ呼び方が浸透しているため、本調査では「方言」という言葉を用い、本稿でも文脈に沿って「方言」という呼称を用いている。

表 1 方言の理解度の自己評価

		一般（島内出身）	一般（島外出身）	小中高生	合計
a	よく分かる	107（50%）	8（17%）	0（0%）	115（40%）
b	ある程度分かる	71（33%）	9（20%）	3（11%）	83（29%）
c	あまり分からない	26（12%）	17（37%）	21（75%）	64（22%）
d	全く分からない	4（2%）	10（22%）	4（14%）	18（6%）
無効回答		5（2%）	2（4%）	0（0%）	7（3%）
合計		213（100%）	46（100%）	28（100%）	287（100%）

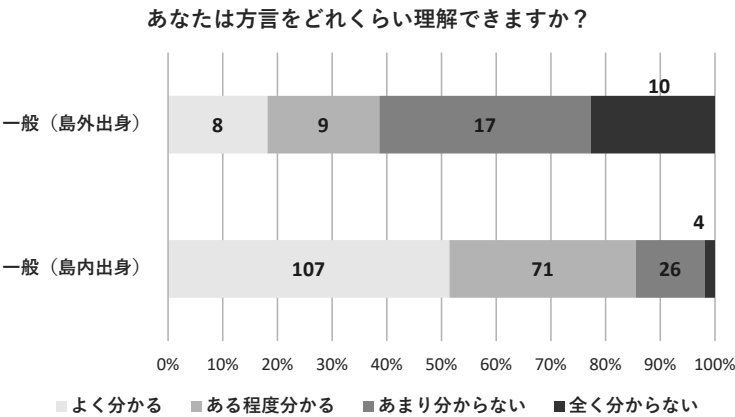


図 2 しまむにの理解度の自己評価（出身別・一般）

次に、小中高生を含む島内出身者（241 名のうち、有効回答のみ）に限定して、同じ調査結果を年齢別に集計したところ、50 代以上で「よく分かる」「ある程度分かる」と回答した人は 9 割を超えるのに対し、40 代では 6 割ほど、30 代は 3 割ほど、20 代以下では 2 割以下にとどまった（図 3）。中年層から若年層にかけて、急激に理解度が下がっていることが分かる。

あなたは方言をどれくらい理解できますか？（島内出身者）

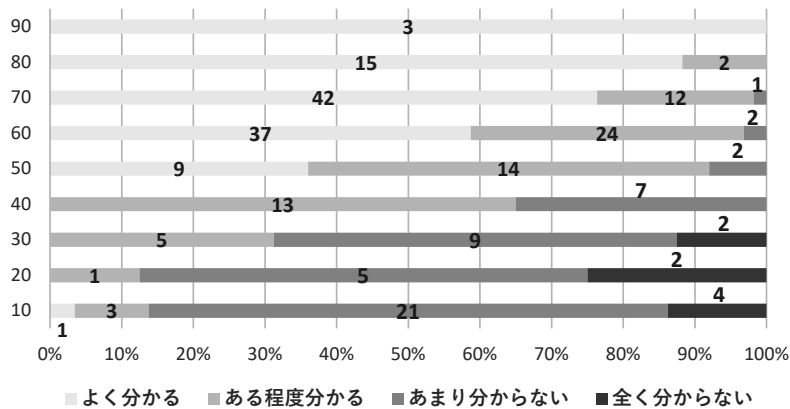


図3 しまむにの理解度の自己評価（島内出身者、年齢別）

3.2.2 理解度上昇への希望

3.2.1 の問いで「方言をあまり分からない」「全く分からない」と回答した人（82 名）に限定し「あなたは方言を理解出来るようになりたいですか？」と尋ねた。その結果，6%が「是非，理解できるようになりたい」，60%が「出来れば，理解できるようになりたい」，28%が「あまり，理解できなくても良い」，6%が「全く，理解できなくても良い」と回答した。

「是非，理解できるようになりたい」「出来れば，理解できるようになりたい」を合計すると，66%の人が理解度上昇を望んでいることが分かった。

あなたは方言を理解できるようになりたいですか？

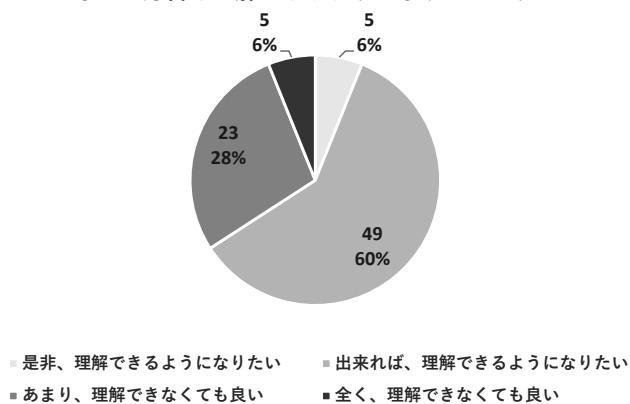


図4 しまむに理解度向上への希望（※「理解度が低い」と回答した人に限定して）

3.2.3 理解できるようになるためにどんな場所で学びたいか？

更に、3.2.2 の質問で「是非、理解できるようになりたい」「出来れば、理解できるようになりたい」と回答した人（54 名）に限定して「**方言を理解できるようになるために、どんな場所で学びたいと思いますか？**」と質問した（選択制、複数回答可）。

その結果、一番多いのは「日常の中で自然に」、次いで「高齢者との交流」「しま唄」「自習教材」が続いた。選択式ではあるものの、イベント・定期講座のような特別な場所ではなく、日常の中に取り入れながら、自然なかたちで習得したいというニーズが見えた。

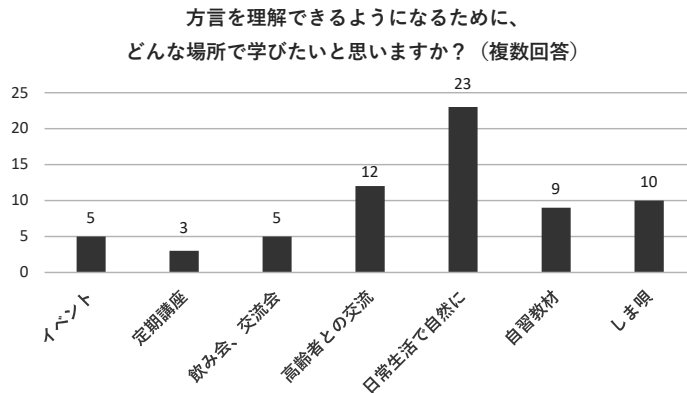


図5 しまむに理解度向上への希望（※「理解度を上げたい」と回答した人に限定して）

3.3 しまむにの産出能力（話す能力）に関して

次に、しまむにの産出能力（話す能力）と産出能力向上の希望について尋ねた。

3.3.1 しまむにの産出能力

しまむにの産出能力（話す能力）に関する自己評価を尋ねるために「**あなたは方言をどれくらい話せますか？**」という質問を行った。その結果、全体の 22% が「流暢に話せる」、27% が「ある程度話せる」、25% が「あまり話せない」、18% が「全く話せない」と回答した。

3.2.1 でみた理解度の調査と同様に、出身地による差は大きく、島内出身で「流暢に話せる」「ある程度話せる」と回答した人が 6 割ほどだったのに対し、島外出身では 2 割以下となった。また、小中高生で「流暢に話せる」「ある程度話せる」と回答した人はいなかった。表 2 は属性別に集計したもの、出身地別に集計しなおしたものが図 6 である。

表2 しまむに産出能力の自己評価

		一般（島内出身）	一般（島外出身）	小中高生	合計
a	流暢に話せる	59 (28%)	4 (9%)	0 (0%)	63 (22%)
b	ある程度話せる	73 (34%)	4 (9%)	0 (0%)	77 (27%)
c	あまり話せない	48 (23%)	7 (15%)	16 (57%)	71 (25%)
d	全く話せない	18 (8%)	22 (48%)	11 (39%)	51 (18%)
	無効回答	1 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (0%)
	無回答	14 (7%)	9 (20%)	1 (4%)	24 (8%)
合計		213 (100%)	46 (100%)	28 (100%)	287 (100%)

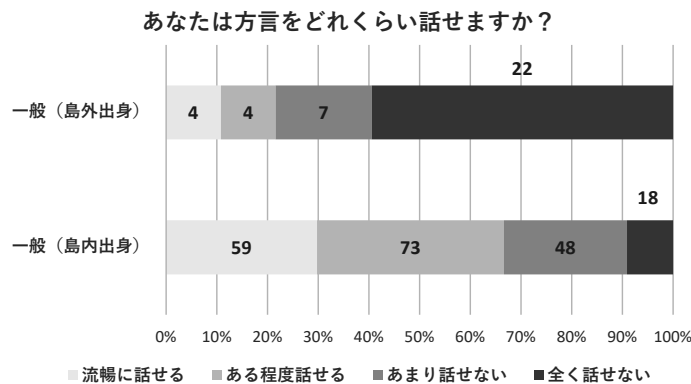


図6 しまむに産出能力の自己評価（出身地別）

次に、小中高生を含む島内出身者（241名のうち、有効回答のみ）に限定して、結果を年齢別に集計したところ、60代以上で「流暢に話せる」「ある程度話せる」と回答した人が8割を超えるのに対し、50代では3割ほどになり、40代以下では1割以下となった。3.2.1の理解度の自己評価と比べると、しまむに産出能力の低下は理解度の低下と比べて20歳ほど変化が進んでいることが分かる。

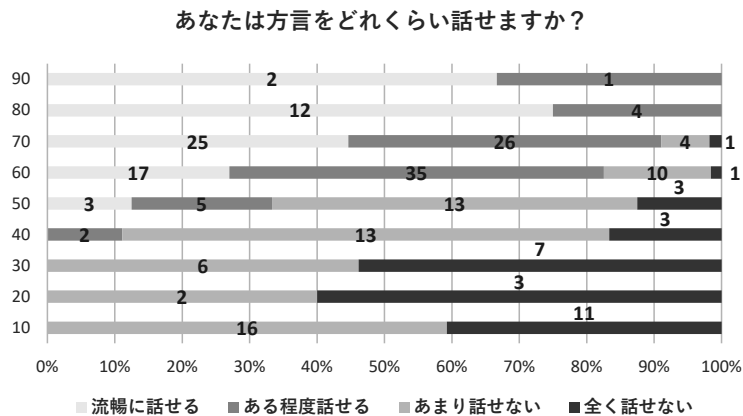


図7 しまむに産出能力の自己評価（島内出身限定、年齢別）

3.3.2 産出能力向上への希望

3.3.1 で「方言をあまり話せない」「全く話せない」と回答した人（122 名）に限定し「あなたは方言を話せるようになりたいと思いますか？」と尋ねた。その結果、有効回答のうち 12% が「是非、話せるようになりたい」、46% が「出来れば、話せるようになりたい」、35% が「あまり、話せなくても良い」、7% が「全く、話せなくても良い」と回答した（無効回答：4）。「是非、話せるようになりたい」「出来れば、話せるようになりたい」を合計すると、58% の人が方言の産出能力の向上を希望していることが分かった。

あなたは方言を話せるようになりたいと思いますか？

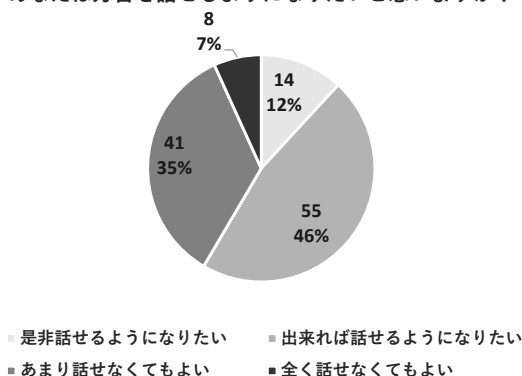


図 8 しまむに産出能力上昇への希望

3.3.3 話せるようになるためにどんな場所で学びたいか？

3.3.2 の質問で「是非、話せるようになりたい」「出来れば話せるようになりたい」と回答した人に限定して「方言を話せるようになるために、どんな場所で学びたいと思いますか？」と質問した（選択制、複数回答可）。その結果、一番多いのは「日常の中で自然に」、次いで「しま唄」、ついで「高齢者との交流」が続いた。3.2.3 で理解度の上昇のために行った質問と比べると「しま唄」が増加し、「自習教材」が減ることが特徴である。唄や高齢者との交流などをふくめ、しまむにを日常の中に取り入れながら、人との交流の中で自然に習得したいというニーズが見える。

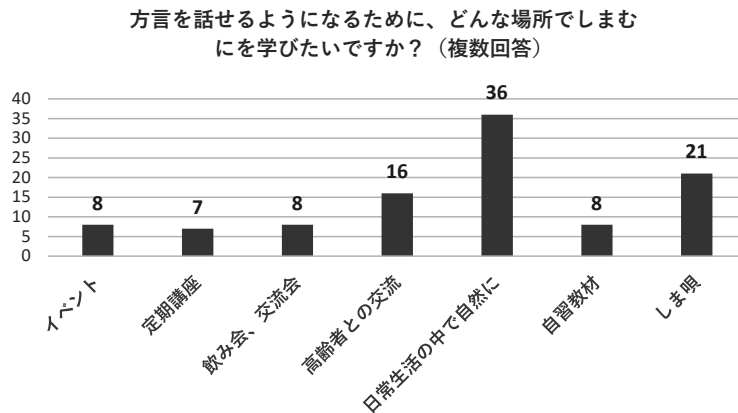


図9 しまむにを学びたい場所

3.4 しまむに継承に関する意識と行動

最後に、しまむに継承に関する意識と行動について尋ねた。

3.4.1 しまむに継承への期待

「あなたは島の方言を次の世代に継承したいと思いますか？」という質問に対し、全体の21%が「是非継承したい」、53%が「出来れば継承したい」、21%が「あまり継承しなくてもよい」、2%が「全く継承しなくてもよい」と回答した（表3）。有効回答のみを図示すると図10のようになる。

一般回答者（大人）に関しては、島内出身者よりも島外出身者の方が継承に肯定的な回答をする傾向が見られたものの、その差は統計的に有意ではなかった⁴。小中高生については回答者数が少ないものの、約8割弱が継承に肯定的な回答をしていた。

表3 しまむに継承への期待

	一般（島内出身）	一般（島外出身）	小中高生	合計
是非継承したい	40 (19%)	12 (26%)	8 (29%)	60 (21%)
出来れば継承したい	114 (54%)	24 (52%)	13 (46%)	151 (53%)
あまり継承しなくて良い	45 (21%)	8 (17%)	7 (25%)	60 (21%)
全く継承しなくて良い	4 (2%)	2 (4%)	0 (0%)	6 (2%)
無回答	10 (5%)	0 (0%)	0 (0%)	10 (3%)
合計	213 (100%)	46 (100%)	28 (100%)	287 (100%)

⁴ 継承肯定派（是非継承したい、出来れば継承したい）と継承慎重派（あまり継承しなくて良い、全く継承しなくて良い）に分けたカイ二乗検定。 χ^2 : 0.024, p 値: 0.878, 自由度 (df): 1

あなたは島の方言を次の世代に継承したいと思いますか？

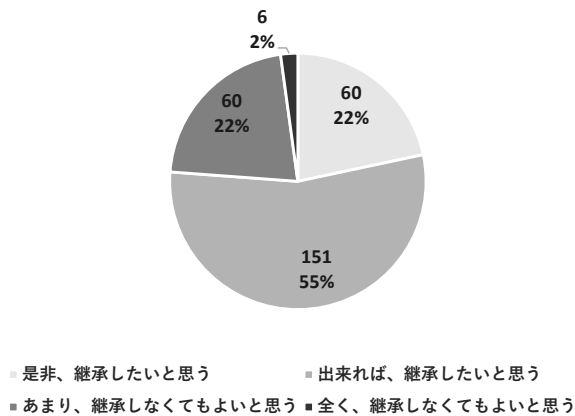


図 10 しまむに継承への希望

全員を対象に年代別にみると、50代～80代では8割前後、90代では人数が少ないものの100%が「是非、継承したい」「出来れば、継承したい」と回答しているのに対し、20代～40代はその割合が6割ほどになる。10代（小中高生）は再び8割近くが継承に肯定的な回答をしている。

あなたは島の方言を次の世代に継承したいと思いますか？

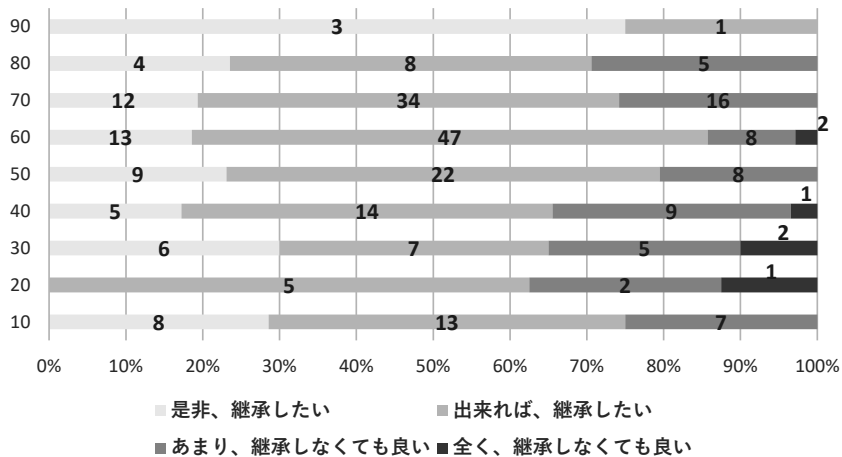


図 11 しまむに継承への希望（年代別）

3.4.2 しまむに継承に向けた行動

3.4.1で「あなたは島の方言を次の世代に継承したいと思いますか？」という質問に対し、「是非、継承したいと思う」、「出来れば、継承したいと思う」と回答した大人190名に限定して、「現在、

方言の継承につながるような取組をしていますか？」と尋ねた。その結果、24名（13%）が「している」、152（80%）が「していない」と回答した（無回答：14名）。継承への意識があっても、実際の行動に繋がるのは1割ほどであることが分かる。

現在、方言の継承につながるような取組みをしていますか？

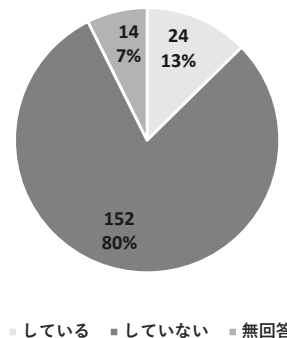


図 12 しまむに継承に繋がる取り組みをしているか？

なお、「している」と回答した方に、現在行っている活動を尋ねたところ 25 の回答があった。「職場で方言を使う週を決めている」「たんにやむにサークルの活動」「音声の保存・記録」「高齢者と方言で話す」「島唄」「子供に話すようにしている」など、個人の活動から職場での取り組み、地域（字）での取り組みなど幅広い活動が行われていることが分かった。

4. まとめ

本稿では、鹿児島県奄美群島沖永良部島知名町田皆集落の全戸調査を通じて、地域住民の「しまむに」の理解度・産出能力、継承への意識、継承の意識がある人の学習ニーズについて検討した。

まず、理解度については全体の 7 割が「よく分かる」「ある程度分かる」と回答しており、島内出身者に限定すると 40 代は 6 割以上、50 代は 9 割以上、60 代以上はほぼ 100% が「よく分かる」「ある程度分かる」と回答している。一方で方言の産出能力（話す能力）については、全体の 5 割が「流暢に話せる」「ある程度話せる」と回答しており、島内出身者に限定すると 40 代は 1 割ほど、50 代は 3 割ほどが「流暢に話せる」「ある程度話せる」と回答した。60 代は 8 割、70 代は 9 割、80 代以上で 100% となるが、聞いて理解することに比べて、話す方が難しいと捉えられており、衰退も 20 年ほど先に進んでいることがうかがえる。

次に、方言を「理解できない」と感じている人の 7 割近くが理解度の上昇を、「話せない」と感じている人の 6 割近くが産出能力の上昇を望んでおり、方言能力の向上への期待は比較的高いことが分かった。方言の習得方法としては、「日常生活の中で自然に」が突出して多く、次いで「高

齢者との交流」「しま唄」という回答も多かった。定期講座やイベントなど特別な場面ではなく、日常生活の中でしまむにを習得したいという意向が見える。

最後に「しまむにの継承」については、有効回答の76%が次世代の継承を望んでおり、継承への機運は高いことがうかがえる。一方で、継承を希望した人の中で「実際に何らかの継承活動をしている」人は1割ほどであり、継承への意識が実際の行動に必ずしも繋がっていないことも分かった。

今後、この地域でしまむに継承の取り組みを進めるうえでは、本稿で明らかになった世代差やニーズを踏まえたうえで、人々の関心に合った取り組みを進めることが、効果的な展開に繋がると考える。

参考文献

- Moseley, Christopher (eds.) (2010) *Atlas of the World's Languages in Danger*, 3rd edition. Paris: UNESCO Publishing.
- Yamada, Masahiro and Akiko Yokoyama (2024) Community-based language revitalization. International Symposium on Research and Teaching of Endangered and Marginalized Languages in East and Southeast Asia, 2024/5/4.
- 横山晶子 (2021) 「言語継承のアプローチに関する試論: マーケティング理論を参考に」 沖縄言語研究センター定例会, 2021年1月9日.
- 横山晶子 (2023) 「沖永良部島民の言語意識資料—アンケート調査を元に—」 『方言の研究』 9: 161–172.
- 横山晶子・籠宮隆之 (2018) 「言語実験に基づく言語衰退の実態の解明—琉球沖永良部島を事例に—」 『方言の研究』 5: 353–375.

参照 Web サイト

- 知名町ホームページ／月別住民基本台帳人口・世帯数 <https://www.town.china.lg.jp/choumin/kurasu/chosejoho/chinacho/jinko-setaisu.html> (2024年12月4日閲覧)
- 和泊町ホームページ／和泊町の人口 <https://www.town.wadamari.lg.jp/tyoumin/kurashi/jinkou.html> (2024年12月4日閲覧)
- 横山晶子 (2024) 「田皆字しまむに意識調査」 https://researchmap.jp/multidatabases/multidatabase_contents/detail/265451/eb05e960df1fd0b47dbcb7a4783e4f2c?frame_id=526761 (2024年12月4日確認)

Language Revitalization and Community Awareness in Okinoerabu Island: Comprehensive Household Survey of Tamina District

YOKOYAMA Akiko

NINJAL / NIHU

Abstract

This study examines residents' comprehension, productive ability, inheritance awareness, and learning requirements regarding "Shimamuni" (an endangered language spoken on Okinoerabu Island, Northern Ryukyu) based on a household survey conducted in Tamina District. The results show that whereas 70% of the respondents indicate being able to understand Shimamuni, only approximately 50% indicate that they can speak it, thus revealing a discrepancy between comprehension and production. Additionally, many residents expressed the desire to improve their language proficiency, with particular emphasis on the importance of acquiring it naturally in daily life. Regarding intergenerational transmission, 76% of the respondents wish to impart the language to the next generation. However, only approximately 10% are actively engaged in revitalization efforts, thus highlighting a discrepancy between awareness and action. These findings offer insights for the development of sustainable language-transmission policies that consider residents' language attitudes.

Keywords: language revitalization, Okinoerabu, Ryukyuan language, intergenerational transmission, language awareness